

2022年10月30日

説教「恵みの賜物」ローマの信徒への手紙5章12～21節

牧師 小林 恵

わたしたち人間に、共通して深く関係する人物がいます。それは、最初の人アダムです。このアダムこそが、わたしたち人間の本質を最大限にあらわしているからです。創世記2章には、アダムが神によって土の塵で形作られ、その鼻に命の息を吹き入れられて生きる者とされたと記されています。人間が、土の塵というもろさ、弱さをもっており、神によって生かされている存在であることをアダムの創造はあらわしています。しかも、後に創造されるエバと一緒にあって、神が禁じられた木の実を食べてしまうという、人類最初の罪を犯してしまったその人でもあります。わたしたちは誰一人として、このアダムと無関係ではありません。アダム同様、わたしたちは皆、弱い土の器であり、神によって命を支えられて生きる存在なのです。

ローマの信徒への手紙5章12節は、この視点に立って「このようなわけで」と書き始めています。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」。注目したいのは、一人の人アダムによって罪が世に入ったことと同時に、ここに死が入り込んだ、しかも、死はすべての人に及んだと言われていることです。つまり、罪が死をもたらしたのだと言われているのです。確かに、後の6章23節でも、「罪が支払う報酬は死です」とパウロは記しています。これは、土の塵より創られた人間の運命であると言えるのかも知れません。

人間の「罪と死」。わたしたち人間は、その苦しみ、その絶望から解放されなければなりません。それゆえ神は、愛とゆるしの証しとして、命の希望として、キリストの恵みをすべての人に与えられたのです。一人の人アダムの罪から全ての人に罪と死がもたらされた結果、神は一人の人イエス・キリストによって、全ての人をゆるし、肉体の死をこえた新しい命に生きる者としてくださったのです。

5章で語るパウロの論調は、終始一貫しています。まさしく、アダムからキリストへの大転換です。いわば、最初の人アダムから始まった罪の歴史は、最後の人キリストによって終止符を打たれたということなのです。

何事も、始めが肝心、始めが大切です。しかし、人類の歴史は、その最初でつまづいてしまいました。本来、神と共に生きるはずが、罪を犯し、神から離れて生きるものとなってしまったのです。もはや、取り返しのつかない事態でした。

しかし、物事は終わりで決まるとも言えます。神は、一人の人アダムから罪を重ね続けた人間に対して忍耐を重ねられた結果、最後に一人の人キリストによって全き救いの恵みを与えてくださいました。人間が罪と死の支配から、新しい命に生きる者へと大転換させてくださったのです。まさに、終わり良ければすべて良し、神による大逆転劇でした。

話は変わりますが、カーニバル（謝肉祭）という祝祭があります。これは受難節、つまりイースター前の40日間に断食をし、この間は肉食が禁じられていたために、この受難節に入る直前に大いに肉を食しようということが始まったお祭り騒ぎの習慣です。宗教改革者マルチン・ルターは、ある時こ

んな事を語ったといいます。「ある男が、カーニバルになると喪服を着て悲しそうな顔をしていたという。そしてキリストの受難日になると、逆に晴れやかな衣装を身に着けて、上機嫌であったという。お前は どうしてそんなことをするのか、とある人が尋ねると、その男はこう答えたという。『カーニバルではみんな大騒ぎをして、たくさんの罪を犯します。だからとても悲しいのです。ところが受難日には、キリストがわたしたち憐れな罪人のために死なれたことを聞かされます。それで、私はうれしくて仕方がないのです』」。

この喜びの意味を、15節はこう記しています。「恵みの賜物は、罪とは比較になりません」。キリストの恵みは、アダム以来の人間の罪と比較されるようなものではないと御言葉は断言しているのです。キリストの十字架と復活の恵みは、人間の罪をはるかにこえた救いの出来事であり、それはアダムが罪を犯した以前の状態への回復ではなく、むしろ罪ある人間の新生です。言うなれば、罪人であったはずの人間が罪を取り除かれ、全く新しい人間へと変えられて生きる、それがキリストにおいて神が与えてくださる恵みの賜物なのです。

有名なアメージング・グレースを作詞したジョン・ニュートンという人は、晩年に認知症を患い、記憶が失われていくのを悲しんだといいます。しかし、彼はこう言ったというのです。「多くの事を忘れるが、私が大罪人だったこと、そして、そんな私を主イエスが命を捨てて救ってくださったこと、この二つは忘れない」。

とは言え、人間は自分の事を忘れてしまいます。ある人は、こう述べていました。「人間は、自分の罪をも忘れてしまうかもしれない。しかし、忘れてもいいのではないか。なぜなら、主がなしとげてくださいました救いの恵みが、あまりにも大きいからだ。この恵みだけは、忘れることはないだろう。少なくとも、神がわたしたちを忘れられることは、決してない」。

パウロは20節でこう述べています。「律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」。罪が増えて神の恵みがさらに満ちあふれるのだから、罪を犯し続けた方がよいという意味ではありません。人間が罪の中に生き続けることを、神はけっしてお喜びにはなりません。それは神の御心ではありません。むしろ神の御前に罪を告白して心から悔い改める時、その時にこそ、神はキリストの恵みをもって罪の縄目から苦しみ悩む者を解き放ってくださいます。

キリストという恵みの賜物によって、神は全ての人を愛しておられます。その喜びと希望を、共に生きる人たちに証ししていく歩みへと導かれるよう祈っていきましょう。